【報告】障害のある人の生涯にわたる支援

実践に学ぶ

ゆたか福祉会の歴史と共に生きた人生をたどる
――職員の記録から

グループホーム職員 鳥田 広祐

はじめに

今回レポートするのは私の勤めているグループホームで最もゆたか福祉会との関わりが長く，最高齢の林さん（仮名，女性，知的障害〈知的3度B〉）についてである．私は林さんと2013年4月にグループホームの職員として出会ったのだが，この報告では，林さんとゆたか福祉会との出会いから，林さんが歩んできた人生を，これまで数多くの職員によって書き記されてきたケース記録，実践記録，文集などをもとにたどることにする．林さんにかんするレポートは1970年頃，林さん30代から始まって，今日まで続いている．近年は高齢化によってだんだん意思表明が難しくなってきた林さんであるが，これまで本人の思いをどうくみ取り繋いできたのか，ホーム職員として大切にしてきたことや思いを報告していきたい．

1 ゆたか福祉会との出会い

1969年にゆたか福祉会でゆたか作業所が認可された．障害者が地域ですごす場所も制度もなかった当時，それに励まされて，林さんの母も当時の作業所づくりに参加した．「歩いて行けること」から林さんも40歳の時，無認可A作業所を利用することになった．それまでは20年以上ずっと在宅生活だった．母も仕事に出てしまうため，一人で食事を作ったり，家やアパート周りの掃除をしたりして，困ったときには大家さんにお願いをして毎日暮らしていた．在宅から作業所への生活の変化は不安もあったと思われるが，家で家事の手伝いをしていたことや真面目な性格が作業所の仕事と繋がりやすかったようで，毎日楽しく通った．当時の仕事は洗濯ばさみの組み立てなどだった．職員もおらず，親たちが職員代わりとなって活動し，林さんの母も他の親たちと一緒に活動していた．

この間も親たちは作業所新設や運営の安定化のため，土地探しや資金作り（ほかほかコンサートなど），作業所の認可運動に熱心に取り組んだ．その結果，全国でたくさんの作業所ができていった時代である．林さんは，同じ区内の工場の跡地を借りて1983年に新設されたB作業所に移り，油回収や洗濯，ふきん折りの作業をした．作業所が広くなったこと，そしてなによりA作業所の時より給料がたくさんもらえるようになったことが嬉しかったようであった．林さんは当時のことをB作業所10周年記念文集（1993年発行）の中で，「（無認可A作業所では）ひとつきやっても（給料が）1,000えんしかならなかった．ほんとうのこづかいていど」と言う．B作業所で働くようになり，給料が3万円位になったのだった．

B作業所に通い始めた当時のこんなエピソードが残されている．

「夕方のニュースを見ていたら雨がふってくるっていってたの．私，大丈夫だろうと思って洗濯物（作業着）を干してきてしまった．悪いけどいれておいてちょうだい．」と林さんが作業所に電話をかけてきたことがあった．しかし，電話を受けた職員が忘れて帰って，案の定，雨に濡れてしまい，林さんはかんかんに怒ってしまった」（浜島・小林，1986）．

仲間からは頼れる存在，お姉さん的存在と慕われるようになった林さんである．地域の中でひとりぼっちだった林さんがゆたか福祉会と関わる中で，仕事をして給料をもらい働くことの喜びを感じることができたのだ，仲間たちといっしょに過ごす新しい居場所が見つかったのだと，みることができた．

2 共同ホームに対する親たちの思い

B作業所の運営が徐々に軌道に乗り始めた時から，親たちの思いはホームづくりへと移行していった．

林さんの母は娘が障害をもっていたことから，親戚から白い眼でみられ，父の戦死後，自ら親戚関係の縁を切り，母ひとり子ひとりであった．そのため自分が亡くなった後を強く心配し，「どうしてもグループホームがほしい」「亡くなってしまってから，入ったって何もできない．元気なうちに自立した姿を見て安心したい」と切実な思いを話していた．それは林さんの母だけではない．“親なき後”のねがいが出発点となり，親たちはホームづくりの取り組みに力を注いできた．親たちの中で議論を重ねるうちに，“親なき後”から“親も元気で長生きしながら，子どもの自立を見守っていけるホームづくり”をめざして活動に取り組まれるようになった．

この当時B作業所を中心に「がんばりっ子（自立）宣言」という取り組みがあった．作業所では仕事する姿が位置づいてきた一方で，家では親任せ，基本的な生活習慣が身についていない仲間もいる中で，家庭でも何か目的をもって取り組んでもらいたいといった職員の思いからスタートしたもので，仲間自身が，通勤をバスに挑戦しよう，朝7時半に自分で起きようなどという目標を立てた．林さんも作業所の文集で「お金の使い方を考えよう」という目標を書いていた．また，林さん自身もホームに対する思いがあったようで「お母さんはもう年をとっているので私は一人でくらすときがきます．一人でアパートでくらすのはさびしいので，お友だちと一しょに生活したいです．お母さんがいなくなってもたのしくくらせる共同ホームが早くできるとよいとおもいます」とも自身の宣言の中に書いていた．

3 自立に向けた生活体験実習

作業所親の会では共同ホームづくりのための議論，積立金や生活施設の見学会，学習会を重ねてきた．その積立金を基に職員1人，親1人（他の子の親），ボラ1人で月曜日から金曜日まで作業所から歩いて5分の民間の借家を借りて，作業所の仲間2人ずつが1週間泊まってみる“生活体験実習”を始めた．林さんも挑戦をした．家の手伝いをよくしていたことや年齢的に他の仲間よりも上であるため，親と離れて泊まる不安よりも「銭湯に行けて良かった」「アイスクリームを買って食べた」など自分でやりたいことをできたことが印象に残ったようであった．一方で，林さんの母はいけないと分かっていながらも，泊まっている時に林さんの様子を見に行ったようである．「できれば親子でずっと一緒にいたい」と思う一方で，子の自立に向かって親も離れていかなければ…と揺れる親の思いがあった．また職員は体験ホームで生活をする仲間の様子からどんな支援を目指すべきか考えた．体験実習に取り組む中で親子・職員ともに考えていかなければならないことも見えてきた．

この取り組みののち，グループホームが制度化され，1989年ついにCホームが開所し，生活体験実習を続けながら，1991年（54歳）に林さんは正式に入居となった．

4 ホームでの暮らし

林さんは「自分のことは自分でやる」という思

とりた こうすけ
ゆたか福祉会 ゆたか生活支援事業所なかがわ／愛知県